

アメリカ語学留学

経済学部学生 内藤久也

昨年1989年の10月から9か月余り、私はアメリカへ留学しました。留学とひと口に言っても、現在は様々な形の留学があるのですが、私が選んだのは語学留学でした。自分の英語力と、初めての海外生活ということを考えて、まず最初のステップはこのくらいが良いだろうと判断したからです。そして、語学学校へ行くかたわら、パイロットの操縦資格を取得したり、グレイハウンドのバスを使ってアメリカ大陸一周の貧乏旅行をしたりもしました。いつもチャレンジする気持ちを忘れなかったアメリカ滞在でしたが、一日一日が新しく貴重な体験でした。それを語る時、題材としてはパイロットの訓練中での危険な出来事や、アメリカ横断旅行でのハプニングをとり上げた方が刺激的でおもしろいのかも知れませんが、語学留学によって得たものは大きく、考えることも多かったのをそれを中心に話をしようと思います。

私の選んだインディアナ大学ブルーミントン校は、緑が豊かで森林の多いインディアナ州の南部に位置しています。州都のインディアナポリスでは毎年、有名なカーレースが行われ、全米各地からの見物客で賑わいます。緑に囲まれた美しいキャンパスは広大で一般の道路が縦横に走っているので、普通の街にいるような錯覚さえ覚えます。ここで3万人以上の生徒が学問に励んでいます。私がこの大学附属の集中英語コースを選んだのは、プログラムの質が高く、教授の数も豊富だったからです。もっともアイビーリーグなどの名門校になると、もっと質が高く厳しい内容を持っているのですが、何しろ学費がかかるのでやめておきました。クラスは6段階に分か

れ、レベル6が最も高いレベルです。語学学校に日本人が多いというのは今や常識ですが、ここもしかりで、夏になると日本人が過半数を占めていました。アラブ人もかなり多く学んでいました。私はレベル5まで言ったところで修了証書もらい、サマーコースで正規の講義をとりました。スピーチコミュニケーションというプレゼンテーションの技術を学ぶクラスでしたが、アメリカ人の中に混じって英語力のない東洋人がひとり奮闘するのは実にこっけいな姿です。でも初め大変だったのが、クラスを一期間終えるころには、やり遂げた満足感と進歩したという実感がわいてきました。英語クラスの話にもどすと、ここでは自分の英語力を伸ばすのに、今まで中学校から蓄積されたものがものをいきました。アメリカ人と会話をする時は、彼らは俗語を多用し独特の言いまわしをするので、実用面において学校英語はあまり役に立ちません。しかし短期間で総合的な語学力を上げようとする場合、6年以上教室で学んだ英語は、基礎力として大いに役立ちました。時がたつて単語や構文など全部忘れたと思い込んでいたのが、案外自分でも驚くほど覚えていたのです。中学、高校を通じた英語教育は、枠づくりという点で評価されるべきだと思います。が反面、それは文法中心の教育であり、英語で自分の意見を述べるといった機会がなかったので、アメリカの英語クラスではずい分苦勞しました。文法や読解はできるのに、リスニングとスピーキングの能力が他国の学生よりはるかに劣るのです。日本人には概してこの傾向があります。クラスではあまり発言せず、目立ちません。これと対称的なのがアラ

ブ人で、彼らはよくしゃべり発言するのですが、文法も書くのも苦手です。日本人はペーパー試験の成績がいいので、比較的上のクラスにかたまるのですが、彼らはその逆になります。さて、語学留学というのは、ともすれば安易な方向へ流れやすい性質があります。比較的短期間ですし、一般の大学の授業ほど厳しいものではなく、クラスには日本人が多いので、お互い日本人同志で寄りそって日本語で相談したり、しゃべったりしがちです。だからといって、語学留学はだめだ、やらない方がいいということにはならないと思います。自分で計画した留学を実りあるものにするのは、当人の気持ちしだいです。確かに英語だけを勉強するというキャンパスライフは、一般の留学に比べると楽な方でしょう。しかし意志をもって積極的に行動するなら、クラスでも課外でも多くの貴重な体験をすることができるのです。



友人のアパートメントにて
(インディアナ州ブルーミントン)

今回の留学の目標のひとつは、語学力をアップすると同時に異なる国の人々となるべく多く接し、互いに理解し合い、ボーダレスな心を持ちたい、ということでした。まさにその願いはかない、英語習得以外の面で得たものは何といっても大きかったです。私ははじめ生活していたのは、大学院の寮だったので、世界各国からの留学生もかなり多く、さながらインターナショナルホテルといった感がありました。カナダ、バミューダ、ブラ

ジル、パナマ、ボリビア、プエルトリコ、韓国、インドネシア、ソ連、トルコ、アイボリーコースト、イギリス、と枚挙にいとまがありません。それらあらゆる国々の人と語り合う機会が持てたことは、大変幸運で刺激的な経験でした。彼らとの交友を通じて、どの国の人とも分けへだてなくつき合えるという自信をつかむことができました。さらに、文化習慣のちがいをあれみんな同じ人間なんだな、という共通の意識が持てたのは大きな喜びでした。また発展途上国といわれるような貧しい国の人からは、「自分以外の誰にも頼ってはいけない」という自主独立の精神を学びました。彼らの学問に対する強い意志と情熱は、その勉強量の多さと普通の姿勢からうかがい知ることができました。

アメリカ人学生は私たち留学生に対して非常に好意的でオープンです。留学生だからといって特別視したりせず、外国人であることもあまり意識していないようです。それは一つにはアメリカ人のパーソナリティでもあるのでしょうが、もう一つはアメリカの大学が、伝統的に外国人留学生を積極的に受け入れる土壌を持っていた結果であるとも言えます。世界各国の入りが集まってきて学問に打ち込むことができる自由な環境と、充実した施設がそこにはありました。もともと、歴史的に多くの人種が移民してできたような国なので、そんな土壌があるのは当然と言えるのかも知れません。

私のアメリカ人の友達の多くは、音楽を専攻していました。それは私自身音楽が好きで人一倍情熱を持っていたからです。音楽専攻の友達がひとりできれば、たちまち20人30人と輪が広がりました。とにかく共通の音楽の話題で意気投合するので、表面的ではない交友を深めることができたのです。趣味をもらえばコミュニケーションのチャンスもおのずから拡まっていくことを改めて実感しました。この後、これが縁で数人の音楽学生のところにホームステイをさせてもらうこともできたのですが、そんなすばらしい体験を与

えてくれた彼らに本当に感謝しています。
日本人はどこへ行っても、不思議と集団で行動するようですが、インディアナ大学の学生寮でも同様でした。日本人同志で集まっても、なるべく英語をしゃべるようにすれば良いのですが、それでも学生食堂でいつも同じメンバーで、日本人だけで食べていると、他国の人に「ジャパニーズテーブル」と皮肉られたりします。このような集団行動は、まわりから見てあまりいい印象は持たれないので、慎まなければならないと思いました。留学することについて賛否両論はあるのですが、近年その意義が認められるようになって

カリフォルニアの大学院生活

理学部 前野悦輝

カリフォルニア大学サン・ディエゴ校 (UCSD) に物理学科の大学院1年生として留学したのは1979年のことであった。UCSDは9校あるカリフォルニア大学のなかで学生数ではロス・アンゼルス校 (UCLA)、バークレー本校 (UCB) に次ぐ規模をもつ。UCSDのキャンパスはカリフォルニア州の南端のサン・ディエゴ市郊外、ラホイヤ (La Jolla) という町にあり、青空とビーチの満喫できる環境にある。1987年にノーベル生理学・医学賞を受賞した利根川氏もこのキャンパスで大学院生時代を送られたらしい。私は2年間ラホイヤのキャンパスで過ごした後、指導教授の異動にともなうてニュー・メキシコ州のロス・アラモス国立研究所に移り、そこで博士になるまで大学院後期の3年間を過ごした。ラホイヤに着くとまず住む場所を探す必要があった。学生課に行くと「ルーム・メイト求む」の掲示がいろいろ貼ってあり、その中から適当なものをいくつか選んで電話をかけ

てきたことは事実です。使い古された言葉ですが、視野が広がるとか、国際感覚が身につくといった利点は確かにあるでしょう。ただそういったものは、外国へ行ってあちこちめぐって、風景を眺めていたからといって身につくものでなく、人に接し、できるだけ多くの人々と交流を深め、新しい考え方をどんどん吸収することで初めて生まれるものだというのを忘れてはならないと思います。みんながするから留学するというのではなく、能動的な動機をもってするのであれば、必ず良い結果が得られると確信しています。

る。結局、最初に連絡のついた生物学科の大学院生、Victorとキャンパスのはずれにある大学院生用のアパート村の2LDKのアパートで2年間共同生活を送ることになった。アパートが決まるまでの間、キャンパスにある留学生センターに泊まることができたのには随分助かった。そこには世話役のアメリカ人学生が3名生活しており、当初のいろいろな相談にのってくれた。写真は大学院2年生の頃、他の友人らとVictorに連れられて、太平洋岸を南下してくる鯨を観にいったときのものである。

